10 かつての学び舎から、未来の長岡を育てる

「米百俵プレイス」による中心市街地の再開発と人材・産業育成の拠点形成

新潟県・長岡市｜　第四北越銀行

長岡市の市街地再開発事業としてＪＲ長岡駅前に整備された「米百俵プレイス」。「米百俵」は、戊辰戦争後、長岡藩に支援物資として届けられた米を、あえて食料として消費せず、学校の設立に充てたとする、人材育成の重要性を説く故事であり、銀行、マンション、図書館などが集積するこの大型複合施設は、「米百俵」の精神を現代に受け継ぎ、長岡の未来を支える人づくり、産業振興の拠点として期待が高まっている。

▲再開発地区「米百俵プレイス」の全体像（米百俵プレイス ミライエ長岡 HP より引用）

▲米百俵プレイス ミライエ長岡の入口

長岡市の概要

【面積】891.05㎢

【人口】254,725人（2025年３月１日現在）

- 新潟県のほぼ中央に位置し、日本一の大河である信濃川が市内中央を雄大に流れる自然豊かな長岡市。それでいて新幹線で東京から約1時間30分と好アクセスなこともあり、文化、産業とも調和した魅力的な都市である。
- 毎年８月に開催される「長岡まつり大花火大会」は、日本三大花火大会の一つとして全国的に有名で、多くの観光客を魅了している。
- 歴史的には、戊辰戦争（1868年）や長岡空襲（1945年）など二度の大きな戦禍を経験しているが、その都度、市民の力で復興を遂げている。また、「米百俵」の精神を受け継ぎ、教育や人材育成を重視する風土が根付いている。

「国漢学校」跡地に誕生した地方創生の新拠点

2023年７月、新潟県ＪＲ長岡駅前のアーケード沿いに、銀行、図書館、マンション、企業向けの賃貸スペースなどが入った「米百俵プレイス西館」がオープンした。現在建設中の東館も含め、医療施設やマンションなど４棟に及ぶ大型複合施設である。

米百俵プレイスは、中心市街地の空洞化や若者の市外への流出等の課題に直面していた長岡市において、都市機能のリプレイス等により、老若男女、県内外の人々の交流を生み出そうとする市街地再開発事業の一つである。

「米百俵」とは、戊辰戦争後、当時の長岡藩大参事・小林虎三郎が、支援物資として届けられた米を、あえて食料として消費せず、将来のために「国漢学校」という学校の開口資金に充てたという、人材育成の重要性を説く故事。「米百俵プレイス」の名称は、数多くの有能な人材を輩出した「国漢学校」の跡地に立地しているということに加え、この場所を未来の長岡を支える人づくりと、産業振興を促進する新たな拠点としていく意思を込めて名付けられた。

第四北越銀行は、地元に根差す地域金融機関として、本再開発事業を計画段階から積極的に支援している。

銀行が参画するまちづくり

第四北越銀行は、旧北越銀行が長く長岡駅前に本店営業部を構えていたことから、本店建て替えにあたって本再開発プロジェクトに参画。同行は、長岡市と地域密着型包括連携協定を結んでいた背景もあり、計画段階では、同市やUR都市機構とともに「長岡まちなか民間活力創造研究会」の幹事構成員として、過去の再開発事例の研究等に協力した。また、米百俵プレイスの一部建物の建設資金について、シンジケートローンのアレンジャーとして地元金融機関を取りまとめたほか、米百俵プレイスの共同地権者として西館に同行営業拠点および証券・リース等グループ会社の本支店を集約し、顧客ニーズにワンストップで対応できる営業地盤を整備。さらに、同行の歴史やお金にまつわる情報提供を行う金融資料室「第四北越ミュージアム」も開設した（詳細は、コラム欄参照）。

▲「米百俵プレイス」に新設された同行およびグループ会社の営業拠点（左：外観、右：営業店入口）

上記に加え、同行は、保有フロアの一部を長岡市および県外のIT企業等に賃貸し、首都圏企業の地方拠点誘致や、地域事業者との連携促進にも力を入れている。同行担当者は、こうした取り組みにより、長岡に進出するIT関連企業が増えており、長岡技術科学大学や、長岡工業高等専門学校といった工業系の教育機関でロボット工学や情報工学、電子工学などの先端分野を学んだ学生が地元長岡で就職する受け皿を増やすことにもつながっていると話す。地元学生や若手人材の雇用機会拡大だけでなく、既存企業とのIT・DX分野を中心としたイノベーションによる新たな産業の創出も期待しているという。

“学び”を身近にする「互尊文庫」

「米百俵プレイス」には、図書館やコワーキングスペースをはじめ、各種ワークショップを行うラボ、長岡ゆかりの歴史人物を紹介する展示スペース、ストリートピアノ、カフェ、屋内広場・テラス、そして地元の食材を活かした料理を提供するレストランなど、多彩な機能が揃い、老若男女を問わず人々が自然と集まる空間を目指している。

中でも、特徴的なのは「互尊文庫」という「まちのリビング」をコンセプトにした図書館。多くの人が集まり、人との交流を通して多様なアイデアを生み出してほしいという想いから、館内は「会話OK、飲食OK、撮影OK」としている。また、一般的な図書館は図書分類法（日本十進分類法）に基づき、所蔵本を分類・陳列しているが、互尊文庫ではこの方法をあえて採用せずに、「くらす」「はたらく」「ひらめく」などのテーマに基づいた棚分けがなされており、来館者が“今の自分の関心”にあわせて直感的に本を探し、思いもよらない本との出会いを提供できる、いわば書店とカフェの融合体のようなスタイルになっている。

第四北越銀行は、この図書館設立にあたり、創立150周年記念の一環として、寄付を実施し、長岡市のにぎわい創出に貢献している。

◀図書館の上にある階段状のセミナースペース「ミライエステップ」。最大100人まで収容可能。開設時から、多くの市民が集まるスペースとして活用されている。（米百俵プレイスミライエ長岡 HP より引用）

“にぎわい”の次は“イノベーション”の創出

米百俵プレイスは、今後も段階的に整備が進められ、2026年秋には全館の完成・グランドオープンが予定されている。すでに、駐車場棟の稼働率は計画通りに推移し、賃貸スペースには県外企業が多数入居している。図書館等の公共スペースにも朝夜問わず多くの来訪者が訪れており、「米百俵プレイス」を起点とした街のにぎわいは着実に広がりを見せている。

今後の課題と展望について、第四北越銀行の担当者はこう語る。

「さまざまな人が交わる拠点は確保できた。次はこの拠点を活かし、産業界にインパクトを与えるような長岡発のアイデアやベンチャーが生まれることを期待している。そのためには、当行も資金提供にとどまらず、事業構想段階からの伴走支援が必要だと考えている。」施設の本格稼働を迎え、誘致企業との連携や人材定着支援といった実践的な課題への対応が本格化する中、第四北越銀行の官民連携による地方創生は、いよいよ成果創出のステージへと進みつつある。

Column

地域の記憶を未来へ ― 第四北越ミュージアム

2023年、第四北越銀行は、創立150周年を記念し、旧北越銀行の歩みをはじめ、戊辰戦争からの長岡の復興、産業発展、金融のしくみなどを幅広く紹介する展示施設「第四北越ミュージアム」を「米百俵プレイス」内に開設した。

館内には、１億円紙幣のレプリカや子ども向け金融クイズなど、世代を問わず楽しめる体験型の展示も充実。近年は、2024年に新１万円札の顔に選ばれた渋沢栄一と、同行の前身「第六十九国立銀行」とのつながりを紹介する展示を行い、話題性の高さから来場者の関心を集めている（2025年時点で累計来場者数は約1万人）。また、地域の小中学生が歴史学習の一環として訪れる機会も増えており、金融教育と郷土理解を深める拠点として多くの市民に親しまれている。

▲「第六十九国立銀行」本店

▲ミュージアム館内の様子

◀展示レイアウト